

令和3年度第1回東大阪市総合教育会議

1 日時 令和4年2月14日（月）

開会午後4時30分

閉会午後5時30分

2 場所 市庁舎18階会議室1及び会議室2

3 出席者

市長	野田 義和
----	-------

（教育委員会）

教育長	土屋 宝土
教育長職務代理者	堤 晶子
委員	山中 雅仁
委員	秦 卓宏
委員	田中 宏一

（出席説明員）

教育次長（学校施設整備監事務取扱）	北林 康男
教育次長（教育監事務取扱）	諸角 裕久
学校教育部長	岩本 秀彦
学校教育部参事	森田 好一
小中一貫教育推進室長	出口 博文
社会教育部次長	山口 昌宏
教育政策室長	永吉 勝則
教育政策室次長	笠松 博
高等学校課長	奥井 幸史

（事務局）

市長公室長	山田 琴美
政策調整室長	井上 高宏

4 第1回会議の議事録

(1) 配付資料

- ・令和4年度教育に係る主要な事業案

(2) 開会

- ・市長挨拶

(3) 議題

- ① 令和4年度教育に係る主要な事業案について
- ② その他

(4) 事業案の説明及び意見交換

野田市長：本日の案件は、令和4年度教育に係る主要な事業案についてということで、「コミュニティスクール・地域学校協働活動推進員の導入について」「デジタルドリルについて」「日新高等学校改革事業について」の3事業について、事業内容の説明を聞き、意見交換をさせていただきたい。教育委員会事務局より説明をいたさせます。

出口小中一貫教育推進室長：コミュニティスクール・地域学校協働活動推進員の導入については、本市において、令和元年度より実施している小中一貫教育をさらに推進させることに焦点をあて、盾津中学校区をモデル校区として、学校運営に地域の声を積極的に活かし、地域と一体となって特色ある学校作りを進めることを目的として、令和4年度からコミュニティスクールを導入するものでございます。また、導入に際しまして、地域と学校を繋ぐ中心的な役割を担う地域学校協働活動推進員を配置したいと考えております。

北林教育次長：デジタルドリルについて、現在は東京書籍のタブレットドリルを使って学習しておりますが、令和4年度から、現在使っているタブレットドリルに替えて、商品は未定ですがA Iドリルに変更したいと考えております。A Iドリルは、児童生徒が提示された問題に対し間違った回答をした場合、どのような点に問題があって間違ったのかをA Iが分析、判定し、問題点を克服するための問題を繰り返し提示する機能を有しており、国が掲げる個別最適な学習の実現に適合するものであると考えております。また、令和2、3年度につきましては、経済産業省のE d T e c h導入補助金と言われるものを活用し、一部小・中学校でA Iドリルの試験導入を行い、導入校の教員からは学力が中低位層の児童生徒の学力が向上したとか、今まで予習をしたことがない児童生徒が予習するようになったという声が寄せられており、全市的に導入することで、本市の児童生徒の学力や学習状況が変革されることが期待されます。

岩本学校教育部長：日新高等学校改革事業について、少子化の影響を受ける中で、昨年度日新高校の3学科すべてで初めて定員を満たすことができませんでした。教育委員会といたしましても、学校改革並びに生徒確保が急務であり、学校現場と連携し様々な取り組みを行って参りました。学校内部の改革につきましては、学校長が先頭に立ちまして、スピード感を持ち取り組んでおり大きく変革をしてきておりますが、生徒確保のための広報活動はまだまだ不足していると感じておりまして、昨年度には、高等学校内に日新高校PRスタッフという独自の組織を学校で立ち上げ、生徒自らが学校の広告塔になり、広報活動を行う取り組みなどを行って参りました。昨年度、学校見学などに来ていただきました中学生やその保護者からは非常に好評で、引き続き活動を行いつつ、民間企業からもアドバイスやサポートをいただき、中学生に関心を持ってもらえる試みを企画立案、実行する組織として拡充を図っていきたいと考えております。また他に生徒確保のための重要な取り組みといたしまして、オープンスクール・学校説明会がございます。その説明会に日新高校に縁のある著名人等をお呼びし、まず日新高校に足を運んでいただくきっかけを作り、来校いただいた中学生、保護者に対しまして、日新高校のよさをアピールして、進路選択の候補となる高校になれるよう様々なアイデアを取り入れて実施して参りたいと考えております。

野田市長：ただいま事務局より説明がありました、主要な3つの事業について教育委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。何かご意見或いは事務局に対する補足説明の求め等はありませんでしょうか。私の方から、まず1番目のコミュニティスクール・地域学校協働活動推進員について、コミュニティスクールに対する1つの施策ということとは理解できますが、当該モデル校の保護者や地域はある程度のご理解をいただいていると思いますが、他の校区の人たちへこの間何か説明をやってきたのかどうかということについて教えてほしい。2番目のデジタルドリルですが、すでに小学校でエビデンスがあるというふうに説明を受けましたが、塾では黒板を使って授業をされている。学力向上というところで、実際イメージとしてわかりにくいところがあります。3番目の日新高等学校改革事業ですが、ここ数年、日新高校にアメリカ総領事やイタリア総領事が訪問されていることを日新高校の生徒や教員は知っているが、日新高校の保護者さらには市内25中学校の生徒や教員や保護者が、本来他の府立高校には来ないであろう人たちが日新高校に来ていることを誰も知らない。日新高校は義務教育ではないので、もっと大胆に中学生や保護者にきちんとコマーシャルできると思うが、この辺が非常に疑問です。

土屋教育長：私自ら地域に出向き、今地域で教育を支えていただいております各組織の市の中央の方々に、まず盾津中学校区での取り組みを説明させていただいて、小中一貫教育を掲げたうえで学校運営協議会を運営させていただくという形でご報告をさせていただいております。

北林教育次長：有名進学塾に行かれる方は、今以上に学力を上げたいということで意欲を持って行かれており、親御さんもそれに対するご協力をされているということだと思います。一方で、学校の授業の中で中低位で授業の内容に半分ついていけないと言われる児童生徒が40分間じっと授業時間を行儀よく座っていないといけないという状況が生まれている部分の一部でございます。そういったところを、その子供の学力に応じた問題を出すことによって、子どもがわからないところまで戻れる、わからないところまで戻った上で、学びと言われるものの取っかかりを見つけて、そこから一つずつ階段をもう一度上がっていただくようなシステムに、このAIドリルは有用だと考えておりますので、いわゆる有名進学塾と言われるところがターゲットとされているお子さんと、公教育全体としてターゲットにしている部分というのは、もちろん被るところはありますが、少し見ている視点が違うのかと考えております。結果として、市全体の学力が上がればと考えております。

奥井高等学校課長：日新高校の授業の取り組みについて、中学校への周知についてご説明させていただきます。まずアメリカ領事館、イタリア領事館に2年前に来ていただきまして、授業をやらせております。もちろんその広報についてですが、日新高校のホームページにはアップをさせていただきましたが、中学校に対してダイレクトに送った実績はございません。今後こういう授業を行った際は、ダイレクトに各中学校に送らせていただいて、小中学校の生徒はタブレットを持っていますので、何らかの形で個別に発信できる形を今後考えていきたいと思っております。なお一昨年、パラリンピックのブラインドサッカー代表のキャプテンとして出られた、日新高校の卒業生である川村様に来ていただきました。それについては、各中学校にダイレクトで日新高校よりメール発信をさせていただいた次第でございます。今後、できる限り、いろいろなツールを使って中学校にダイレクトに発信するようにさせていただきたいと思っております。

野田市長：情報発信というところですが、何年前にPTA協議会の皆様と意見交換したいということで、市役所にお越しをいただいたことがあったが、それ以降意見交換できていない。事務局である社会教育部がそういう場面をもっと積極的に作ってもらうことによって、市或いは教育委員会が学校教育に対して何をどう考えているのか、さらにはもし場面や時間が許せば、教育委員の皆様方と市PTAの役員との意見交換などできればと思っております。双方向でないと伝わらないと思っております。教育委員の皆様、何かありませんか。

田中委員：コミュニティスクールの推進員の件ですが、推進員を導入するとなれば、会議の場でだけ話して終わりであればあまり推進になってないイメージがあり、コミュニティスクールは結構重要だと思いますし、今後市としても推し進めていくという話を聞い

ていますから、一緒に時間をかけて協議し合わないで結局形だけで終わってしまうイメージがあるので、その辺を意識して運営していただけたらと思います。

北林教育次長：推進員の件ですが、今回盾津中学校区にモデル的に置かせていただきたいということで、盾津中学校区には中学校 1 つ小学校 3 つ全部で 4 つの学校がございます。この 4 つの学校に対して推進員を置くことで、中学校と小学校 3 校の校区に対して推進員の方から、小中一貫教育をきちんと発信をしていきながら、小学校や中学校で取り組んでいることを地域の方に支えていただきたいという話も含めて、地域へ積極的に足を運んで、地域の役員と地域の方々とネットワーク網がつかれるような推進員を我々が任用し、そこを市教育委員会として後ろから支えていきたいと考えております。

田中委員：支えていくというのは月 1 回とか月 2 回とか回数は決まっているんですか。

北林教育次長：今のところ、盾津中学校に事務机を置き推進員に座っていただくことを想定しています。盾津中学校の中に事務机があるわけですから、今日は自治会、今日は老人会、今日は 6 年生登校のサポートといった、小中一貫と言われることを進めていく中で、まずは先ほど教育長がおっしゃったように、地域に説明に行った際に、新しい推進員ができれば、まずは地域に紹介してほしい、顔を繋いでほしいと方々言われていますので、そういうところを市教委として初めのつなぎ役というのを一緒にしていきながら、地域の方々に推進員を知っていただいた上で、あとは推進員が日々足を運んでいながら、調整したり、要望を聞いてくる、こちらのお願いを伝えるといったことをさせていきたいと思っております。

田中委員：デジタルドリルですが、勉強についていけない方はコツがわかりさえすれば、どんどん学力は伸びるのではないかという意味では、A I ドリルはすごく良いと思っておりますが、野田市長がおっしゃったように、塾ではあまり A I ドリルを使っていない。先ほど目的が違うという話があったと思いますが、A I ドリルの効果は数字とし出ていますか、母数はある程度の確証がとれているレベルですか。

北林教育次長：現在小学校 3 校と中学校 2 校の 5 校に対して、経済産業省の補助金を使って実験をしていますが、この 5 校については、業者から毎月アクセス数や正解率などをフィードバックしてもらっていますので、それで利用率が少しずつ上がっているといった確証を見ていきながら、あとは先生が小テストを出して、実際にどれぐらい点数が上がっているかといったことを見ていきながら、効果をはかっているということになります。

田中委員：ある程度優位性がある形ですか。

北林教育次長：どこがわからないかがわからない児童生徒がいると思いますが、そういった子は、AIがレベルを下げていくなかで、どこかで引っかかりそこから一つずつレベルが上がっていくというような中で、タブレットで勉強することが楽しい、予習してくるようになるようになった話も一部の学校から聞いていますので、今までなかった勉強に対する意欲が、たとえ5人10人でも出てくればそれが波及していくということは十分あり得ると思っています。

田中委員：日新高校の改革ですが、これも野田市長がおっしゃったように、PRされているがまだまだ知られてないということはあると思いますし、日々いろいろな案を出されているとは思いますが、例えば、生徒で授業を作り上げて、中学生を招き入れて一緒に授業をするとか、カリキュラムを自分で作るとか、思い切った施策をするのは難しいですか。外部に発信するのも一つの手とは思いますが、自分たちで授業を作り上げるといったことはなかなかできないですか。

奥井高等学校課長：どうしてもカリキュラムの問題がございますが、今、日新高校として取り入れていますのは出前授業ということで、商業と言いますと、中学校で教科がございませんので、特異性のある教科として、先生と日新高校の生徒が中学校に出向いてそこで一緒に授業をやったという経過があります。評判がよかったと聞いておりますし、同じようにクラブ活動も活用して、学校に体育の授業を出前で行かせていただいて、その授業を中学生にも体験いただくという形で、来ていただくのと合わせて出ていく作業を今年度数回させていただきましたが、次年度についてはもう少し回数を増やして、高校の授業と一緒に中学生に体験いただくということを検討しております。

田中委員：定員に満たないということだったと思いますが、大体どれぐらい人数が増えたらいいと考えていらっしゃいますか。

奥井高等学校課長：1人でも定員を超えるということをまず目標にしております。

田中委員：いろいろな施策があるとは思いますが、もう少し数値を出しつつ計画していったほうがいいのではないかという印象があります。

奥井高等学校課長：今ご指摘いただきましたとおり、まずスケジュールをしっかりと立てて、定数に向けて1人でも多く確保できるように、目標設定をした上で進めてまいります。

田中委員：お願いします。

野田市長：日新高校の定数割れですが、今年度の中間調査でもあまり芳しくない数字が出ています。縁起でもない話をしますが、来月定数割れで入試を迎えたとして、受験者全員を合格するのか、100点満点でせめて30点以上で合格にするのか、30点未満は不合格にするのか。前に教育委員会に聞いたときは0点でも合格という話でしたが、そこは教育委員会として考えを変更した部分というのがありますか。極端な話、足切りを設定するといったことはありますか。

奥井高等学校課長：大阪府の公立高等学校の入試選抜に則って行っております。万が一、そういうケースがあった場合は合格せざるをえない状況ではありますが、現状ではそういう点数を取られて合格されたケースはございませんので、一定中学校が、日新高校の偏差値を考慮して生徒をお送りいただいているところです。

野田市長：何でも大阪府の基準に合わせるのではなく、日新高校の矜持みたいなものを出したらどうか。日新高校のアイデンティティーを出せないのかという話をしたら、卒業式は大阪府と日をずらして開催されます。その辺りも日新高校らしさみたいなものを、足切り点がありますよといったところも必要ではないかと思います。

堤教育長職務代理者：日新高校ですが、良いことをたくさんさっているが、それが外に出ていない、理解されていないのがすごく残念だったので、広報に力を入れられるのは本当にうれしく思います。広報をするときには、学を納めるところなので教育のことを必ずPRしていただきたい。今日の3つの案件はすべてが色々に関わっていて、その教育の特色的なもの、他の府立高校とどう違うのか、それはITを駆使した新しい取り組みで、小中一貫と中高一貫すなわち誕生から一貫した教育を目指していただいているわけですから、日新高校では非常に先進的なIT教育を受けることができるようなイメージを持っていただいて、刷り込みが早い方がみんな来てくれますから、中学校では、3年生になっていない生徒にも繋ぐ授業をしていただけたらと思います。東大阪市として、小中高を繋いだ先進的なIT授業をどのように考えて、どのように実践的な授業に反映していくか、GIGAスクール構想におけるIT教育をどのように考えて、スキームを作り進めていくのか、目標をきっちり立てて進めていただきたいと思います。コミュニティスクールの件ですが、盾津中学校はどこまでもモデル校であって、検証を重ねて他の地域の方にもそれぞれ状況をご説明いただきながら進めていただけたらと思います。日新高校が非常に特色があるのと同じように、私はこのコミュニティスクールが東大阪市の独自色の強いコミュニティスクールになっていくのかなと思っています。ですから、東大阪市の独自色、独自性が強いということは、東大阪市の教育実態に合わせた子どもたちのために最適化を図っていただけるものかなと非常に期待しておりますので、ぜひそういう形で進めていただいて、どのような方向性で、目標と目的をはっきり持って進めていただけたらと思っています。

北林教育次長：コミュニティスクールの推進ですが、教育長と一緒に3小学校区を回らせていただいて、盾津中学校区の弥栄、鴻池東、成和の3つの学校は中学校区内で隣接されているので、それぞれ例えば自治会の考えておられることや老人会の考えておられることが、割と風土的には同じかと考えていましたが、実はその3小学校区でそれぞれ全然カラーが違いましたので、いろいろ工夫をしながら地域へ説明に回りましたが、盾津中学校区という25分の1の中学校区の中の3つの小学校区に説明するだけでも、結構苦勞をしているということと言えますと、残りの24中学校区で進めるときには、小中一貫を推進したいというコンセプトを前面に出して、地域の方々と会話をしながら、それぞれの中学校区の特色を見ながら、今までお支えいただいている地域の方のご努力をさらに推進していくとか、そこを教育委員会として掬っていくといったコミュニケーションは非常に大事と思っております、当然小中一貫を推進していくという前提で動いていますが、今回25中学校区でそれぞれカラーがあるということがわかりましたので、まず盾津でモデルとして実施し、そのあと他の校区に広めていくにあたっては、どこに気を付けていくべきか、どこに声をかけていくべきか、何を掬っていくべきかといったことをこのモデル校の中で慎重に検討し進めていきたいと考えております。

山中委員：コミュニティスクールですが、先週文部科学省が中心となってやっている全国の教育委員会の研修会を見させていただきましたが、その中で、コミュニティスクールで結構苦勞されている一つの点が、メンバーの方の力量と言いますかその熱意の差でかなり苦勞されているのがわかりました。今回の活動推進員導入というのは非常に良い取り組みだと思っていますし、東大阪の力から考えても、十分に及第点のところはいろいろな課題の洗い出しも含めてされるのかなと感じています。その研修会の中で一部非常にうまくいっているところがあって、それは当市のような中核市ではなく東京のこじんまりした区ですが、地域の皆さんがネットワークを持たれており、その中からこの人がいいよ、この人はこういうスキルを持っていてという話があって、今おっしゃられたような地域の特色を活かした策がどんどん案として出てくるそうです。何が言いたいかというと、これまでいろいろな地域の取り組みがあると思いますが、それに加えて、一足飛びにはなかなかできないとは思いますが、地域に本当に根差した取り組みをできるように、まず1年目は非常に大事だと思いますので、そこはぜひお願いしたいと思っております。AIの話ですが、何でもかんでもAIと言えいいのかというのはありますが、AIは個別最適化でお子さんに合った形でいろいろ教えてくれますが、では先生は何をするんですかというところだと思います。いろいろあると思いますが、先ほど次長がおっしゃられたように児童生徒のデータがいろいろ集まってくるので、そのデータをいかに使うかというところで先生が活躍できるかもしれないですね。AIをやることで児童生徒の学力が上がる、それに加えて先生方が次に何ができるかというところはもうすでに考えていらっしゃると思いますが、そこが一つのポイントなのかなと思っています。

す。日新高校ですが、広報も非常に良い事業と思っています。先ほどコンテンツの話もありましたし、ホームページは本当に観たい人しか観ないです。私の会社もいかに魅力を発信するかというところで結構悩んでいまして、例えば社長がフェイスブックをやっていますが、今フェイスブックを観に来る人は40代50代です。若い人が観ているティックトックやリールズというショート動画を発信するツールを使っとうまくやっている企業に、結構求人が集まったりしています。日新高校に来る人は、大体東大阪の方たちですか。

岩本学校教育部長：9割ぐらいが市内で、1割が市外です。

山中委員：ターゲットはその9割の中学生と親御さんですね。だからそこに対して、より効果的なティックトックがいいのか、面白い配信をするとか、市長がおっしゃるように義務教育ではないので、ぜひ何かターゲットを決めて面白いコンテンツでより多くの人が観るような施策をぜひ実践していただきたい。

森田学校教育部参事：先ほど教科書はデジタル教科書か紙の教科書かという議論がされていましたが、子供によってどちらがいいかというのはなかなかいろいろな形があると思いますので、一方だけということではなくて、それをうまく使い分けながらやっていくことが求められていくのかなと考えているところですので、一方だけでということではないようにしたいと今のところは考えているところです。それからご指摘のありました先生の役割が今後どうなっていくかということですが、子供たちが自分たちで課題と向き合ってやっていくということになっていきますと、先生方はその子供の思考力や表現力や学びに向かう様子というのがよく見えるようになるのではないかと思います。今まででしたら、クラス全体に伝えながら、1人で全部見ていかないといけなかったのが、デジタルになると、子供たちがどこで詰まっているか、どこで困っているか、どこに時間をかけているかといった細かいことがわかるようになると思いますので、そういったことなどを横から分析しながら子供の困り感にどう寄り添っていけるかというところに時間をかけたり、指導と評価の一体化の部分でより丁寧に指導や支援ができるようになると思います。

奥井高等学校課長：日新高校についてですが、今指摘いただきました内容につきまして、まさにその通りだと思っております。現在、PRスタッフという組織を高校生自身が作って、中心になって活動しておりますので、まさに生徒目線で、来年度予算措置いただきましたら、例えばインスタやホームページのもう少し見やすい方法を高校生から意見をもらって、それを民間事業者と検討して中学生に一番適した発信方法を模索しながら、早急に対応していきたいと考えております。

山中委員：中学生だけでなく、親御さんが日新高校を受けさせようという気になるような発信をぜひご検討いただけたらと思います。

岩本学校教育部長：ぜひ参考にして進めていきたいと思います。

秦委員：コミュニティスクールから少しそれますが、PTA活動を通じて思うのが、どうしてもメンバーに力関係ができて上下関係ができてしまう。そうすると上下関係によって、どうしても発言力の強い方の方向に意見が集約されることが多々あるので、そういうことが修正できるような、何か監査のようなポジションが別にあって、目が行き届くような状態にしていきたいです。それぞれ皆さん意見が違うところがあるので、どうしてもこの意見を通したいとなってしまうと、一方で非常に反発が出てなかなか協力していただけないということが出てきます。このコミュニティスクールについても、できればその辺りの上下関係がない体制を作っていただければ、スムーズにいくのではないかと自分自身がPTAの役員をしたときに思ったところがあります。もしそういうことを考えていただければありがたいと思います。次に、デジタルドリルですが、田中委員もおっしゃっていたように、将棋もそうですが、ひろゆきさんという方が、ゲームをきっかけにパソコンに触れてパソコンスキルを身につけるのが大事だというような話をされていた気がします。今の子はみんなゲームをしますので、その感覚でAIドリルに触れてもらうのであればこのAIドリルが入口というのは良いと思います。ただそこから先になると、先ほど市長がおっしゃられたように、塾がAIドリルを使わずにもものすごくアナログでやっておられるのは、何か勉強の過程で非常に大事なことがあるのだと思います。例えばそれはよく言われる手に覚えさせることの大切さかもしれません。AIドリルを入口として使うその先で先生がどういうふうに工夫してアナログ化に持っていかれるのかを検討して頂ければと思います。最後ですが、日新高校のオープンスクールに伺ったときに非常に良い取組みをされていると思いました。全然日新高校を知らない者がその学校に行けるというのは大変貴重な機会だと思います。ただ市長も皆さんもおっしゃられましたが、その発信ができていなかった。堤委員もおっしゃられたようにそれが非常に残念だと。そこで出前授業だけではなく、逆に学校へも来てもらってそこで授業を受けてもらったり、1日過ごしてもらったり、また、文化祭等ももっと発信して出来るだけ学校を知ってもらう。できるかどうかは別として、入試テストを1回だけではなくて、他が残念だったときにもう1回テストが受けられるようなやり方ができるのであれば、人数確保に繋がっていくのかなと思ったところです。

出口小中一貫教育推進室長：先ほどのコミュニティスクールの件ですが、まず一つは協議会の事務局は小中一貫教育推進室が持たせていただきます。委員の任期は1年とさせていただきます。もう1点、京都で小中一貫教育を中心に講師をなさっておられる大学教授にアドバイザーという形で会議に参加していただく形になっておりますので、以

上の３点でいろいろな方にご意見を発言していただくような仕組みを作っていきたいと考えております。

北林教育次長：少し補足ですけども、とりあえずモデル校ということですので、我々もできるだけ関与し、横から見ながら脱線していくことがないようにこのモデル校区のコミュニティスクールについてはしっかりサポートしていきたいと思っています。デジタルドリルの件ですが、秦委員がおっしゃっていただいた、入口がそこで次のレベルに達することができれば、我々も非常に万々歳だと思っています。今で言いますと、入口をしっかり定めてその入口から一つ二つステップが上がっていく中で、例えばこの予算を次の予算に切り換えていける、次のやり方に切り換えていけるというようなことができれば理想だと思っています。まずこの予算で、デジタルドリルと言われるものの中から取っ掛かりを作らせていただいて、次のステージに上がれると言われるような状況へどう持っていけるかというのは、現場ときちっと声を聞きながらやっていきたいと思っています。

田中委員：日新高校のPR方法について、中学の先生が生徒に日新高校を進めているかどうかアンケートを取れないですか。

奥井高等学校課長：各中学校に、日新高校の担当教諭をつけまして、日新高校のアピールをすることで、各学校には日新高校の教諭が年に数回８月以降に何度かうかがわせていただきまして、そこで中学校とつながせていただいて、担当同士でいろいろ話をしております。

田中委員：実際先生が生徒と話すときに、先生が生徒に日新高校を薦める回数はわかりますか。私の受験のときは、先生が言った学校から選んでいたところがあるので、先生の方から言ってくれたら良いと思いますが、先生の日新高校への意識調査を年に数回やれば、先生の頭の中に日新高校が刷り込まれるのではないかと。PRとなると押されている感じになるが、先生の意識に日新高校は良い取り組みをやっているという意識を植え付けていく方法をやってみてはどうでしょうか。

奥井高等学校課長：アンケートをとりながら広報するというアイデアは非常に素晴らしいと思っています。日新高校が昨年７月に中学生と中学校の教員の先生方に１度だけそのような簡単なアンケートを取りました。そういったアンケートを１回ではなく、２回３回と取っていけば、植えつけられるのではないかと感じておりますので、来年度、参考にさせていただいて、複数回やりたいと思います。

堤教育長職務代理者：東大阪は中核市で本当に大きなまちで、２５中学校区から日新高校

に来てもらえるように、知名度が上がるマスのPRが必要ですよね。知名度が上がるほど受けてもらいやすくなります。個に対して1人ずつに届くPRと、世間全体に日新高校は良い学校と知っていただけることを何かやっていただけるといいと思います。デジタルコンテンツのことで色々考えていただいているので、きちんと位置付けしていただいているとは思いますが、iPadをどのように使ったらいいツールであるのかということから始まって、どういう教育をしたい、すべきなのかということがあって初めてiPadがあって、中のコンテンツということになるとと思いますので、コンテンツだけ焦点化するというのではなく、全体的にメタ認知した上でコンテンツを導入して使っていただくということをしていただけたらと思います。

諸角教育次長：堤委員がおっしゃったのは、いわゆるデジタルコンテンツとしてのiPadというよりもiPadの機能を使って良さを活かした教育はないものだろうかということだと思いますが、一番の特徴はロイロノートだと考えております。やはり子供たちの共同学習という部分では、すでにかかなりの学校でされておりますし、先日教育センターで指導主事が大学の先生を招いて研修を実施し、全学校のICT担当に対して、自分だったらどんな授業を作るかということで、50以上の案が出てきています。先生方がiPadを使って、この機能の有効性をどう授業に反映していくかという研究が進んでおりますので、来年度に向けてさらに広げていきたいと考えております。

堤教育長職務代理者：中高連携の授業について、秦委員がおっしゃいますように、学校に行くというリアルが一番大事と思いますが、オンラインの授業でもいいのかなと思います。だから大学の先生や専門の先生に、どのような授業が一番最適化が図られていて、重要なかをご指導いただくのが一番かと思います。東大阪市の専属というか、そういうことをやってくださる方がいてくださればいいと思います。

田中委員：私はAIドリルにすごく期待していますが、先ほど誤回答したら戻れるという説明がありましたが、どこまで戻れますか。例えば5年生が1年生まで戻れますか。

北林教育次長：学年は跨げます。通分がわかっていなければ通分のところまで戻れます。

田中委員：上の学年へもいけますか。

北林教育次長：上もいけます。

田中委員：カリキュラムが決まっている中で飛び越えられますか。

北林教育次長：ドリルの時間を20分で設定したときには、時間内で解く問題数を設定し

ますが、設定の仕方によっては、分数でも高度なところまでいけます。

田中委員：素晴らしいですね。

野田市長：DXによって積み重ねられていくデータについてはきちんと活用していただくようお願いしておきます。今日は令和4年度の主要3事業についてご意見いただきました。今日出た意見というのは、この主要な事業をさらに磨きをかけるという意味で非常にいいご意見を教育委員の皆様からいただいたわけであります。今日だけでなく、今後、教育委員会、総合教育会議を含めて学校教育を良くしていくという観点から、さらなるご協力を申し上げたいと思います。本来でしたら他の案件にも聞きたいところですが時間が1時間というお約束で始めておりますので、その他の案件も含めてこれで終わりますが、事務局から何かありますか。

山田市長公室長：特にございません。

野田市長：それでは、令和3年度第1回総合教育会議はこれで閉会とさせていただきます。